

コメント..シンポジウムの余白に

このシンポジウムでは司会を務めさせていただいた。

司会は、事前の打ち合わせから参加して、報告を十二分に楽しめることや、討論を思うままに仕切ることのできる特権をもっている。だがその反面、みずからの意見を長々と発言することは控えないといけない。欲求不満がたまる仕事である。

もしも司会でなく聴衆の一人だったら、何を発言していたか。残念ながら、そのとき実際に考えていたことは、司会の仕事が終わったとたんに脳内から雲散霧消してしまっている。そこで、改めてシンポジウムの内容をふりかえりながら考えた内容を書き記すことで、務めをはたしたいと思う。

荏 部 直

思想史研究にとって雑誌が持つ意味は、単に思想を読者の頭へ送り届けるための器となることにはとどまらない。編集や造本の作業を通じて、作品としての雑誌それ自体が、ある思想を表現するものでもある。それを編集者個人の思想と見るか、それとも同時代の社会にゆきわたった価値観の表現と見るか。それがまた、思想史研究の問いにもなるだろう。さらに、近代における雑誌の発展と衰退が、思想のあり方と相互に影響しあっているようすを分析するという手もある。もちろん三宅雪嶺の例のように、雑誌とかわつた経験がその人の思想にいかなる影響を与えたのかを探ることも可能だろう。雑誌はこのように思想史研究の素材としてさまざまな可能性を

もっている。だいたいそんなところが、シンポジウムでは語られていた。

ここではもう一つ、和辻哲郎と岩波書店の雑誌『思想』の例をとりあげてみたい。のちに京都帝国大学、東京帝国大学の教授を歴任したことを考えると、純然たるアカデミズムの人物のように思われがちであるが、一九二五（大正十四）年三月に京大講師に就任する前は、むしろジャーナリズムで活躍する文筆家と言った方がよいような生活であった。一九二〇（大正九）年から東洋大学教授となり、二年後には法政大学教授も兼ねるようになってはいたが、当時の私立大学の位置づけから言っても、アカデミズム専門という色彩は薄い。世間での印象は、学術的エッセイを発表する在野の哲学者・文化史家といったところだろう。

この当時、和辻は阿部次郎や安倍能成とともに、人格主義と「教養」を唱える論者として活躍していた。『古寺巡礼』（一九一九年）や『日本古代文化』（一九二〇年）といった文化史関連の著作も、過去の偉大な藝術作品にふれることでみずからの人格を高めるという理想に立脚するものだった。そして、彼らの共通の友人であった岩波茂雄を社主とする岩波書店が、一九二一（大正十）年十月号から、月刊で雑誌『思想』を創刊して、その編集長

への就任を和辻に依頼した。和辻もそれを受け、京都に移るまで三年半のあいだ、編集長として従事することになる。いわば、「雑誌編集者と和辻」とでも言うべき時代をすごしたのである。

ただし、創刊編集長として華々しく個性を発揮したというわけではない。四百号記念で寄稿した『「思想」の初期の思ひ出』（一九五七年十月号）によれば、岩波茂雄が執筆者たちとの関係を大事にし、その人々の間を結びつけるような場を作るために創刊したのであり、和辻自身は「決して主幹のような気持にはならなかった」という。

だが、誌面にかにも和辻らしい特色が見られることも、また確かである。哲学の論文が多いのは雑誌の題名からして当然としても、美術史と考古学の論文が多く、しばしば巻頭のグラビアページや本文中に写真を多数載せている。一種のヴィジュアル雑誌のような性格をもっているが、これは和辻の『古寺巡礼』にも共通する特徴である。その文化史をめぐる関心のありようを、よく示す編集方針と言えるだろう。

この三年半の経験が、和辻の思想にどんな影響を与えたか。当人はそのことについてまったく語っていないので、仮に、この編集長時代がなかったらどうであったか

ある。

と考えてみよう。和辻は若いころから小説や戯曲を発表していたが、創刊と同じ年の『光』十月号に載せた「土下座」と、『思想』の第二号におそらく埋め草で書いた「或子供の死——亡き秀夫の霊に手向く」を最後に、フイクションを手がけるのをやめてしまう。おそらくその一因は、創作よりも、さまざまな分野の知識を整理してまとめることに、面白さを感じるようになったからではないか。

もしも和辻が『思想』編集長を務めていなかったら、そして京都での学究生活に入ることがなかったら、日本文化史への関心は美術史とりわけ宗教美術史にとどまったままだったろう。新しい哲学の知識を吸収するのも、アンリ・ベルクソン、テオドル・リップスと新カント派で打ち止めだったかもしれない。雑誌の編集作業を通じて同時代のさまざまな学問潮流にふれた経験が、のちにアカデミズムのなかで、多様な哲学理論を組み合わせながら倫理学の体系を作り、総合的な倫理思想史を構想するのを大いに助けたのではないだろうか。

雑誌に関わった経験が思想家にどのような形で影響するかは、人物によってさまざまだろう。だが和辻の場合は、編集者の生活が、総合的な体系構築者としての新たな人生へ進むための、重要な基盤になったと思えるので

（東京大学教授）